

第 48 回卒業証書授与式及び第 20 回専攻科修了証書授与式告辞

本日、ここに、鈴鹿工業高等専門学校第 48 回卒業証書授与式及び第 20 回修了証書授与式を執り行うにあたり、ご来賓並びに保護者の皆様をはじめ、多数の方々のご臨席を賜り、喜びを分かち合えますことを、心から感謝しお礼申し上げます。

本日、晴れて鈴鹿工業高等専門学校を卒業する 188 名、専攻科を修了する 23 名の皆様、そして、温かく見守り、強く支え続けられてこられました保護者の皆様、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。入学されてからの年月を振り返り、卒業生・修了生のみならず保護者の皆様にも万感の思いが込み上げていることと思います。

本校は、知・徳・体、三育の全人教育を建学の精神とし、勉学、課外活動などに積極的に取り組むとともに、日本技術者教育認定機構（JABEE）の認定を受けた、学科と専攻科を縦断する複合型生産システム工学プログラムにより、大学レベルの高度な工学教育も実施してきました。その中で、楽しかったこと、つらかったこと、うれしかったこと、悔しかったことなど、色々な思いが心をよぎっていることでしょう。もっと頑張ればよかったと反省することもあるでしょう。しかし、皆様は、無事、この卒業、修了の日を迎えられました。大いに誇りに思ってください。そして、自信にしてください。ただ、ご家族の方、先生方など、周りの人々の支えにより、この良き日を迎えることができたということを決して忘れないようにしていただきたいと思えます。

さて、皆さんは、編入学、本科生、専攻科生と様々ですが、入学後、概ね 3 年から 7 年間、学園生活を送られました。本科生が入学された 2009 年は、リーマンショックの翌年ということで、景気が後退局面に入りました。製造業をはじめとする、ものづくり産業は、不況とともに円高の影響も受け、海外展開が積極的に図られ、国内産業の空洞化が懸念されるようになりました。そのような中、夏の衆議院選挙では民主党が圧勝し、300 議席を上回る議席を獲得し、新しい時代の到来が期待されたものでした。このような世相を反映して、その年を表す一字漢字は、「新」となったことを思い出される方は多いと思えます。

以後、猛暑の「暑」、東日本大震災の「絆」と続きました。千年に一度の大災害の後、早いもので 3 年が経ちました。被災地では復興の遅れが言われ、残念な面もありますが、人々の優しく、暖かく、力強い絆は健在です。そして、ロンドンオリンピックのゴールドメダルラッシュ、山中伸哉教授のノーベル賞に象徴されるような「金」になり、昨年は「輪」になりました。

これは 2020 年のオリンピック開催が東京に決まりましたが、手をつなぐ五輪の「輪」を象徴するとともに、世界平和の「和」も併せて象徴しているように思います。そして、今年は、ソチでの冬季オリンピックが終わったところですが、感動の場面が多々ありました。皆さんと同年代の金メダルの羽生君には、力強さとともに被災地への思いやりにみられる謙虚さを併せ持つ若者のすばらしさを感じましたし、銀メダルの葛西選手の「努力は報われる」といった言葉は、私のような年配の世代にも、希望を与えてくれました。さらに、パラオリンピックでの障がいのある選手の活躍は、感動とともに生きる励ましをもたらしています。

このような時代に、皆様は、就職、専攻科や大学への進学など多様な道を進まれます。これから大人として生きる時代は、今まで以上に社会がスピーディに変化する時代になる

でしょう。そして、結果が求められる時代でもあります。しかし、それを当たり前とせず、ちょっと立ち止まり、「それでいいのか？」と批判的に考える思考が必要になります。昨年の卒業式では、「スローに生きる魅力とチェンジしない力、不易流行の大切さ」を述べました。今年は、結果も重要ですが、目的・目標を達成するために努力する「プロセス」の大切さを強調したいと思います。

プロセスを重視した取り組み方を「非帰結主義的アプローチ」といいます。たとえば、学園生活において、何としてでもいい成績を取るとか、必要単位の取得を最大の目的にするとかといった、結果を最も重視する考えが帰結主義ですが、この主義では、結果に至るプロセスは二の次になります。このような考えが高ずると不正行為が生じます。試験においてはカンニングとか、そして研究においては、今、世の中を騒がしているような問題です。皆さんと共に歩んだ教職員一同は、皆さんが学園生活において立派に成長することを願って、結果に至るプロセスを、より重視して努力されてきたと思います。非帰結主義的アプローチの大切さを心に留めておいてほしいと思います。

鈴鹿高専には養成すべき人材像が四つあります。一つ目に生涯にわたる学習を明記しています。それは、生涯にわたり継続的に学修し、広い視野と豊かな人間性をもった人材を養成することです。二つ目は、高い専門知識と技術を有し、深い洞察力と実践力を備えた人材、三つ目は、課題探究能力と問題解決能力を身につけた創造性豊かな人材、そして最後は、コミュニケーション能力に優れ、国際性を備えた人材です。キーワード的にいえば、人間性、実践性、創造性、国際性の四つです。あなた方は、実践力を伴った創造力を有する、国際的にも活躍できる、人間性豊かな人物に育ってほしいと願って教育されてきたのです。この人材像は、一生を通じ当てはまるものですので、人生の節々で折に触れて思い出していただきたいと思います。

さて、皆さんの高専生活では、学業に加え、全力で取り組んだ課外活動や様々なイベント、そして海外研修も、キャンパスライフを豊かにしてくれたことと思います。私は校長二年目になりますが、昨年にも増して、夏の全国体育大会や文化イベント、秋のロボコン・パテコンなどの各種コンテスト、高専祭や学会発表などを通じ、皆さんの素晴らしい成長する力を確認することができ、うれしく思いました。また、鈴鹿高専のホームページのフォト広報に記載されていますように、皆さんが受賞した数多くの表彰の喜びを分かち合うこともできました。文理系、体育系などの様々な分野からの表彰でしたが、鈴鹿高専が全国的に高い評価を受けていることを実感できました。

卒業後、修了後、皆さんは就職、進学と進む道は違いますが、立派な社会人に育ってほしいと思います。そして、高専卒業生として、とりわけ持続可能な社会づくりに貢献するエンジニアに育ってほしいと思います。皆さんが学んだ「工学」は、英語で言うと、元は「Civil Engineering」です。宇沢弘文・東大名誉教授は、社会的共通資本を論ずる著書の中で、この工学の目的を「すべての人々が豊かな文化の香りの高い生活を営むことができ、自然も社会も安定的に維持できるようなインフラストラクチャーを建設することが目的である。」と説いています。皆さんは、多様な工学の専門分野から、このような社会のインフラストラクチャーづくりにアプローチすることになるでしょう。目先の利益だけを求めず、高い志のもとに、仕事に暮らしに励んでいただきたいと思います。

最後に、皆さんにお伝えしたいことがあります。皆さんとともに、幾人かの教職員も新

しい職場に、人生へと踏み出されます。長きにわたり教育に尽力していただいた材料工学科の井上教授、一関高専から2年間の任期で赴任された電子情報工学科の柴田教授、そして事務サイドから多方面にわたりサポートをいただいた坂井課長補佐などの方々です。これらの方の思いもひとしおかと思います。井上先生は嘱託教授として引き続き授業および産学官連携コーディネーターを担当していただくことになり、ありがたく思っています。柴田教授は一関高専に戻られご活躍されますが、鈴鹿での経験がお役にたてば幸いに存じます。

それでは、卒業、修了する皆様方が、この良き日をこれからの人生のスタートラインとして、充実した思い出深い高専生活での学びや経験を貴重な財産として、立派な人間に育ち、幸せな人生を送られることを祈念するとともに、本日の式典にご多用中にも関わりませず、ご参加いただきました、ご来賓、保護者の方々に厚くお礼を申し上げ、私の挨拶とします。

平成 26 年 3 月 25 日

鈴鹿工業高等専門学校長
新 田 保 次